



大学生のひとり親家族のイメージ

著者	竹田 美知, 李 ?媛, 上野 顕子
雑誌名	日本家政学会誌
巻	62
号	5
ページ	317-328
発行年	2011
URL	http://id.nii.ac.jp/1044/00000926/





Kobe Shoin Women's University Repository

Title	大学生のひとり親家族のイメージ University Students' Images of One-Parent Families
Author(s)	竹田 美知 (TAKEDA Michi) 李 環媛 (Lee Kyoung Won) 上野 顕子 (Akiko Ueno)
Citation	日本家政学会誌 (Journal of Home Economics of Japan), Vol.62 (No.5) : 317-328
Issue Date	2011
Resource Type	Journal Article / 学術雑誌論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

大学生のひとり親家族のイメージ

竹田美知^{1*}、李璟媛²、上野顕子³

(¹神戸松蔭女子学院大学, ²岡山大学, ³金城学院大学)

原稿受付 平成 22 年 1 月 15 日; 原稿受理 平成 23 年 2 月 5 日

University Students' Images of One-Parent Families

Michi Takeda^{1*}, Lee Kyoung Won² and Akiko Ueno³

¹Kobe Shoin Womens University, Hyogo 675-0015

²Okayama University, Okayama 700-8530

³Kinjo Gakuin University, Aichi 463-8521

The number of one-parent families has been growing in Japan. One-parent families occur for different reasons. Some people are unmarried and are raising a family on their own, or they are separated or widowed. Many of these people suffer from social prejudice. The purpose of this research was focused on what variables are affecting university students' opinions of one-parent families and to find out what their image is of single, separated or widowed parents with children.

There are a number of variables: society's opinion of single-parents; opinions on people with children who remarry; opinions on gender roles; experience of taking classes on gender studies; one-parent families as reflected by the mass media; opinions on the students' future with regard to marriage and having children and how these affected students' opinions of single-parents and opinions on gender roles.

There are four images of single parents with children. They are as follows: that children in one-parent families might be more independent; that the parents and children might be less dependent on each other; that there might be less communication between parents and children; that parents and children might be more co-dependent. In Japan, the most positive image is represented by the latter.

Keywords : One-parent families ひとり親家族, Social prejudice 社会的偏見, Family Images 家族イメージ

1. 緒論

平成 17 年の『国勢調査』¹⁾によると、ひとり親と子どもからなる世帯は平成 7 年 311 万世帯から平成 17 年 411 万世帯と大きく増加している。このようなひとり親が増加する主要な原因は、親の離婚である。平成 18 年度に厚生労働省が実施した『全国母子世帯等調査結果報告書』²⁾では、

昭和 58 年の母子家庭になった理由として死別 36.1%、離婚 49.1%、未婚 5.3% に対して、平成 18 年には死別 9.7%、離婚 79.7%、未婚 6.7% と離婚による母子家庭の顕著な増加をあげている。父子家庭になった理由も、昭和 58 年死別 40.0%、離婚 54.2% に対して、平成 18 年死別 22.1%、離婚 74.4% と離婚による父子家庭の増加が同様にみられる。

離婚によるひとり親家庭が増加する中で、未婚のひとり親の占める割合は、日本の場合多くない。しかし平成 17 年の『国民生活白書』³⁾によると、第一子の出生数のうち結婚

* To whom correspondence should be addressed
E-mail : m-takeda@shoin.ac.jp

期間が妊娠期間より短い出生割合は年々増加し、1980年では12.6%であったが2000年には26.3%と上昇した。特に18歳から19歳の親の場合8割以上、20歳から24歳の親では約6割、結婚期間が妊娠期間より短い。

このように未婚、離別、死別など様々な状況にあるひとり親家族に関して、ひとり親を対象とした調査は、厚生労働省の前出の調査をはじめ多くの自治体を実施した。(社)日本家政学会家族関係部会研究活動委員会の『ひとり親家庭等に関する都道府県および政令指定都市調査・支援策資料集』⁴⁾では平成18年から平成20年にかけて全国都道府県や政令指定都市単位の実態調査結果を収集し調査方法や調査枠組み、自由回答の結果の検討を行った。その結果、ひとり親の多くは経済的な問題とともに子育てにかかわる不安を抱えており、それらの不安は「ひとり親に対する社会的偏見」によってさらに増幅されていることが明らかになった。

藤原千沙(2005)は、2001年に行った『母子世帯の母への就業支援に関する調査 JIL 調査』⁵⁾から、ひとり親世帯で育ったゆえに子どもが低い学歴しか獲得できないとするならば、貧困が次世代に継承されるだけでなく、配偶者との離別・死別といったひとり親経験も世代に再生産されていく可能性があることを指摘した。

神原文子(2007)は、『ひとり親家族と社会的排除』⁶⁾において、このような子ども世代における機会不平等は、経済的・政治的・社会的・文化的諸権利の不充足・否定・アクセス困難といった「社会的排除」に繋がると分析した。さらに『全国母子世帯調査』では、ひとり親家族が被っている差別や偏見については把握されていないが、『大阪市ひとり親家庭調査』では(近所のうわさ)(住宅を借りるとき)(就職の時)(子どものいじめ)など挙がっている」と述べ、また、転入者であるひとり親家族の親子は、よそ者で異質であるとして、仲間に入れてもらえず、地域情報のネットワークからもはずされ「仲間はずし」という排除があると指摘している。

このようなひとり親世帯に関する研究は、核家族世帯の占める割合の低下、単身世帯や父子・母子世帯などを含む非核家族世帯の比率の増加という世帯構造の変化に伴って蓄積された。しかしそれよりも標準世帯としての核家族の意味が問われ始めたことが、よりひとり親家族の研究を深めた。

山田昌弘(1997)は、『近代家族のゆくえ：家族と愛情のパラドックス』⁷⁾において標準世帯としての核家族の構成を持つ近代家族が、外部社会が要請する家族の機能を最も遂行できる集団として高度成長期にモデルとされたが、その後の個人化・私事化により家族形態が多様化し、もはや家族は、ジェンダーに基づく役割ではその機能を果たせなくなっていると述べている。

牧野カツコ(2009)は、『子育ての場という家族幻想—近代家族における子育て機能の衰退—』⁸⁾において、近代

家族が子育てに適した場であるという言説に対して、「近代家族においては、人と人のかかわる力を育てることが難しく、消費の場となることでの家庭教育力が弱体化し、ジェンダー役割によって父親が家庭において不在になり、地域社会から閉じられ子どもにとって抑圧された場所となってしまった」と反証している。

このような問題意識のもとに、家族に関する研究の対象においても、近代家族のモデルであった標準世帯としての「核家族世帯」から、ひとり親世帯や無子世帯、障害者世帯のような「非標準世帯」にスポットが当てられはじめ、それらの家族に対する研究が蓄積されてきた。

それらの研究報告や『ひとり親家庭等に関する都道府県および政令指定都市調査・支援策資料集』において、「非標準世帯」としてのひとり親家族の実態は明らかにされた。しかし、このようなひとり親に対する社会的偏見の形成過程についてはいまだ明らかにされていない。

そこで、この報告では、ひとり親に対する社会的偏見がどのような要因によって形成されるか、さらにひとり親に対するイメージタイプはどのようなものかを明らかにする。

オルポート(1968)は『偏見の心理』⁹⁾の中で、「家族が子どもに同一化というメカニズムを通して、社会規範や社会的価値観、態度、意見を伝達する過程において、ある集団に対する拒否的態度も寛容さのいずれも家族から子どもへと学習されること」を指摘している。特に、子どもがある集団について、その集団と交流もなく知識もない状況では最初に発せられた親しい人たちからの情報がそのまま受け取られる傾向にあると述べている(オルポート/訳書, 1968)。このような家族による社会化とともに、マスコミによって流された情報、友人、地域の人々など世間から付与されたひとり親のイメージ、教育機関における家族に関する教育など多くの要因が複合的にプラスにマイナスにも影響しあって、ひとり親家族の子育てに対するイメージタイプが形成され、肯定的・否定的意見に繋がるのではないだろうか。筆者らは図1のような調査枠組みを持って質問紙調査を行った。

2. 先行研究の流れ

これまで、ひとり親がどのような社会的偏見によって差別されているかという問題関心によって行われた調査は少ない。

平成4年に実施された東京都女性問題調査研究報告『ひとり親家族に関する研究』¹⁰⁾(《財》東京女性財団, 1993)は、初めて「ひとり親をとりまく人びとの意識や視線や言動のあり方によって、困難や苦悩が増幅されたり緩和されたりしているのではないか」という問題意識をもって実施された数少ない調査の一つである。この調査では、特にひとり親の子育てに対する社会的偏見に焦点を当て、どのような社会的偏見があるのかを、東京都民一般・大学生・高校生を対象として

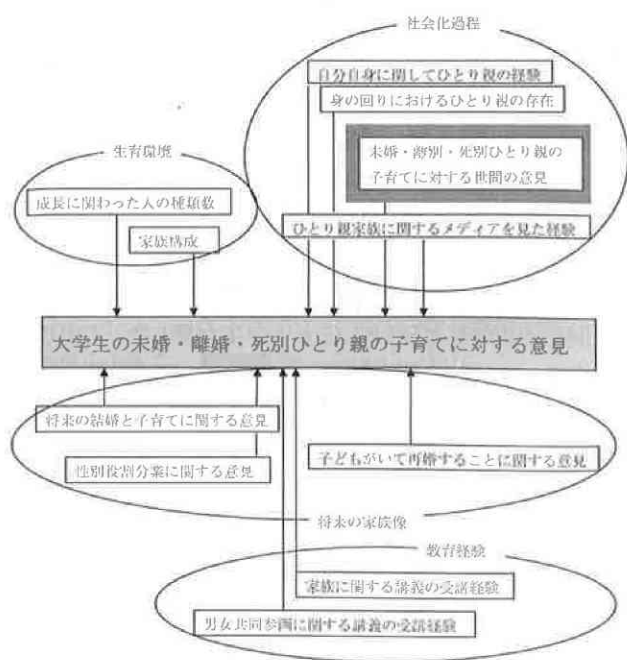


図1. 分析枠組み・ひとり親の子育てに対する意見形成に影響する要因

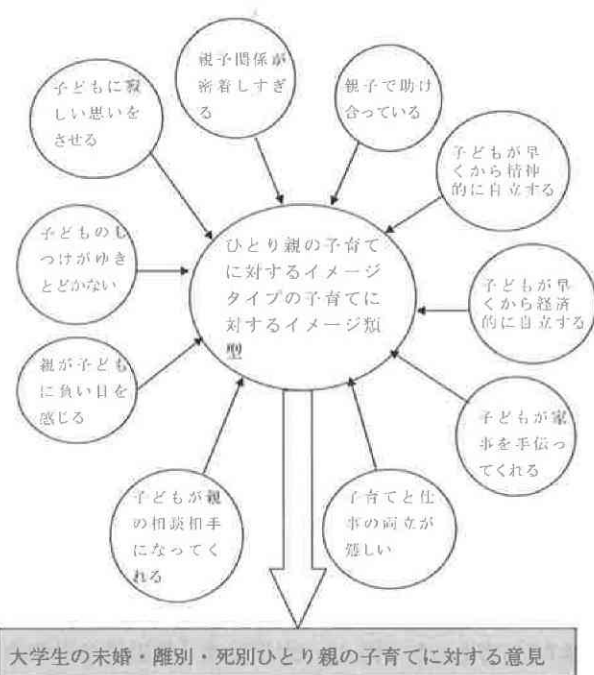


図2. ひとり親の子育てに対する意見とひとり親の子育てに対するイメージ

調査した。

この『ひとり親家族に関する研究』の調査結果をまとめた渡辺秀樹の『ひとり親と家族問題』¹¹⁾によると、「ひとり親で子どもを育てていくこと」に対する抵抗感は全体として6割に達していた。特に高校生と60歳以上の回答者の抵抗感が高かった。その理由として高校生の回答では、第一に「異性の親では思春期の子どもに対応できない」、第二に「相談相手がないので親のストレスがたまる」があげられていた。60歳以上の回答者では、「むずかしい年頃だけに、子どもの性格や行動に問題がおきやすい(傍点は筆者)」という質問項目に対して肯定した男性9割、女性が7割と高かった。

その一方、「親子が助け合って暮らすので気持ちが通じる」、「子どもがしっかり現実をみすえるようになる」などの項目において「そう思う」という比率も高く肯定的な意見もみられる。

また平成21年3月に報告された『ひとり親家庭(父と子・母と子の家庭)の生活と意識に関する調査報告書・民生委員モニター調査(北海道民生委員児童委員連盟, 2009)』¹²⁾は、父子家庭、母子家庭の親を対象としてひとり親家庭への社会的偏見を調査した項目がある。この報告書によると、父子家庭の70%が「社会的偏見はない」と答えているのに対して、母子家庭の48.3%が「社会的偏見はある」と答えている。また母子家庭に対する偏見はこの調査の2003年の調査結果と2008年の調査を比較しても減少はなく、母親の置かれた条件や階層差を越えて母子家庭一般が社会からの偏見を感じていると述べている。

3. 調査の枠組みと分析方法

これらの先行研究から、年齢や性別、生育環境、教育歴などによって、ひとり親の子育てに対する意見に差があることがみてとれる。そこで図1のような分析枠組みを設定し、併せて図2のように、これまでの調査の中でひとり親の子育てについて語られたイメージをあげ、どのようなイメージがひとり親の子育てに対する意見に影響を与えているかを明らかにすることにした。

分析視点は次の5点とした。

1. 大学生が持つ「未婚、離婚、死別のひとり親の子育てに対する意見」がどのようなものであるかを明らかにする。あわせて大学生自身が将来ひとり親になることについての意見も明らかにする。

2. 大学生が感じた「未婚・離婚・死別のひとり親の子育てに対する世間の意見」を明らかにする。

3. 大学生が持つ「未婚・離婚・死別のひとり親の子育てに対する意見」にどのような要因が影響を与えているか、影響を与えている要因間の関係(図1)を重回帰分析とパス解析によって明らかにする。

4. 大学生が持つ「ひとり親の子育て内容をどのようにとらえているかというイメージ」(図2)を、等質性分析(HOMALS)を使って、類型化することによって明らかにする。

5. 析出した大学生の「ひとり親の子育てに対するイメージ」類型は、「未婚、離婚、死別のひとり親の子育てに対する意見」にどのように影響を与えているか、一元配置分散分析を使って明らかにする。

調査は、2007年7月に九州、近畿、東海、東京の10大学（6共学大学・4女子大学）に所属する4年制大学生1年生から4年生を対象として、留め置き調査を行った。配布票数1796票、回収数1379票、回収率は76.8%であった。回収回答票のうち、男性20.1%、女性79.9%であった。

4. 調査結果の概要

この調査の結果の概要は以下のとおりである。

(1) 大学生の未婚・離婚・死別のひとり親家族の子育てに対する意見

大学生の「ひとり親家族の子育てに対する意見」の中で、未婚、離婚、死別を比較すると、一番賛成意見が少なかったのは「未婚の母が子どもを育てること」と、「未婚の父が子どもを育てること」であった。「未婚の母が子どもを育てることに対して好ましくない」と思う人は67.0%（図3）、「未婚の父が子どもを育てることに対して好ましくない」と思う人は67.7%であった（図4）。大学生は「離婚後の母のみの子育ては好ましくない」に対しては49.7%が、「離婚後の父のみの子育ては好ましくない」に対しては50.1%が賛成している。それに対して、「死別後の母のみの子育ては好ましくない」に対しては、20.7%が、「死別後の父のみの子育ては好ましくない」に対しては22.5%のみが賛成と許容的である。

ひとり親として子育てをすることに関しては、未婚、離婚、死別の順で反対意見が多く、育てる親が母親であっても父親であっても同様な傾向を示している。ひとり親となった理由によって、ひとり親の子育てに対する意見の賛否がこれだけ異なるのは、未婚や離別に対する社会的偏見が影響していると考えられる。

大学生自身が将来ひとり親になることに関しては、男女で考え方に差があった。「未婚で子どもをもうける」ことに対し

ても、男性の14.7%が「状況によってはいい」と答えているのに対して、女性は7.9%に止まる（ $p < 0.01$, 図5）

平成4年に実施された東京都女性問題調査研究報告においても大学生が最も抵抗感を感じる生き方として「未婚の母や父となること」で、その比率は9割と高かった。今回の調査においても、比率はやや下回っているが、やはり未婚の父・母に対する抵抗感が高い。

(2) 大学生が感じたひとり親に対する世間の意見

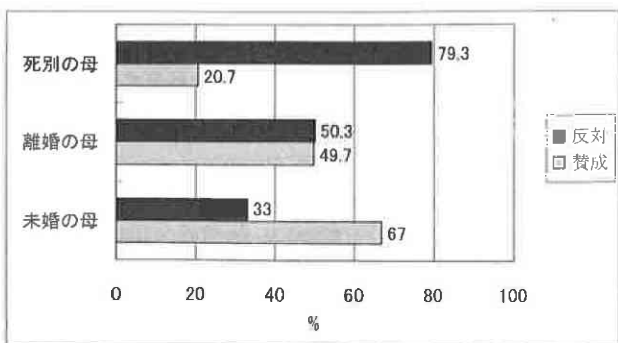
世間が否定的にとらえていると大学生が感じた「ひとり親の子育て」は、未婚の母の子育て85.3%、次に離婚の母の子育て72.4%、さらに、死別の母親の子育て26.7%であった（図6）。この順序は、大学生自身が抱く「ひとり親の子育てに対する意見」とほぼ同様であった。世間の価値観が、大学生の「ひとり親の子育てに対する意見」に大きく影響を与えているのではないかと推測できる。しかし、図1でも示したように、大学生が感じた「ひとり親に対する世間の意見」が直接そのまま大学生自身が抱く「ひとり親の子育てに対する意見」に反映されるとは限らない。家族に関する教育やジェンダー意識など、他の独立変数も大学生の意識に影響を与えていると思われる。

(3) 「ひとり親の子育てに対する意見」に与える影響要因の分析

そこで、大学生の「ひとり親の子育てに対する意見」にどのような要因が影響を与えているかを、重回帰分析によって影響要因を調べた。影響要因の選択については、竹田（2005）が『国際結婚から生まれた子どもの国籍選択とその影響要因—国際結婚を考える会の場合—』¹³⁾において、マイノリティーに対する社会的偏見を調べた調査で用いた独立変数群を参考に選択し図1に示したような項目を変数として設定した。

未婚・離婚・死別の母親の子育てに対する意見

「未婚、離婚、死別の母親だけが子どもを育てることは好ましくない」とい考えに対して、あなた自身はどのように思いますか。

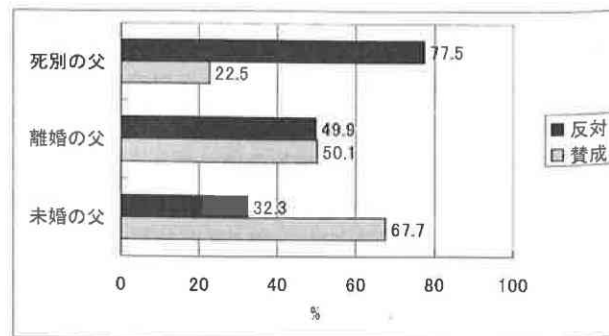


注：非該当を除いた合計の%

図3. 未婚・離婚・死別の母親の子育てに対する意見

未婚・離婚・死別の父親の子育てに対する意見

「未婚、離婚、死別の父親だけが子どもを育てることは好ましくない」とい考えに対して、あなた自身はどのように思いますか。



注：非該当を除いた合計の%

図4. 未婚・離婚・死別の父親の子育てに対する意見

大学生が将来未婚のひとり親になることについての意見

あなたの将来を考える際、「未婚で子どもを育てること」についてどのように思いますか

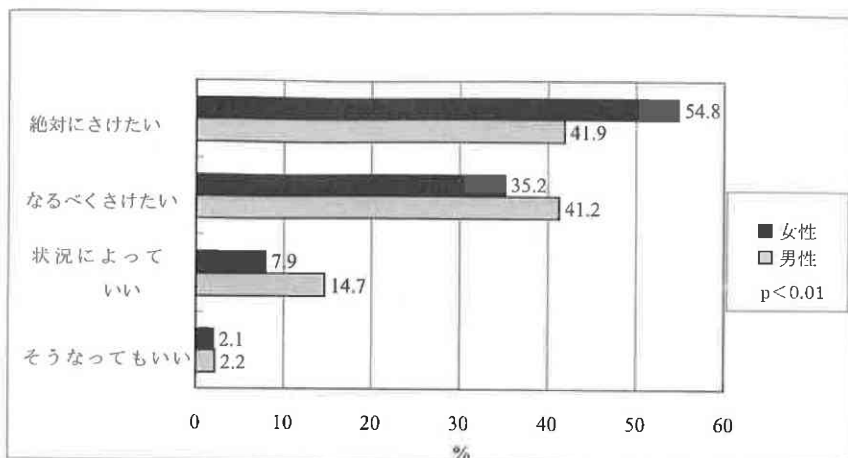


図5. 大学生が将来未婚のひとり親になることについての意見

大学生が感じた世間のひとり親に対する意見

「未婚、離婚、死別の母親だけが子どもを育てることは好ましくない」という考えに対して、世間では、どのような意見が多いと思いますか。

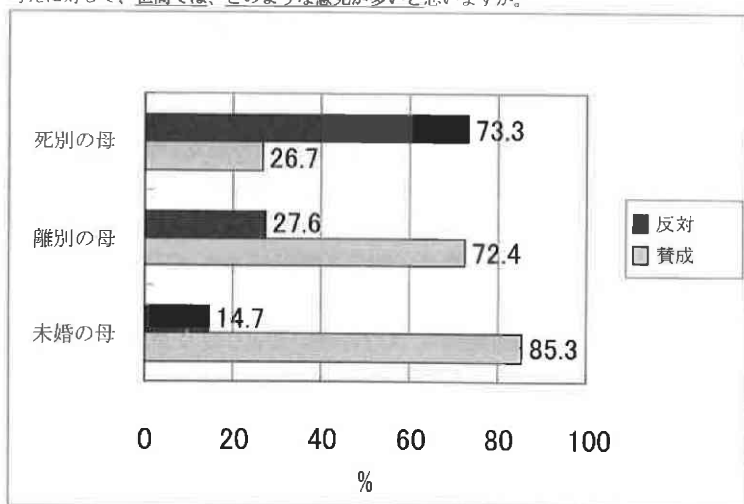


図6. 大学生が感じたひとり親に対する世間の意見

1) 「ひとり親の子育てに対する意見」に与える影響要因（独立変数）

性別構成は、男性 20.1%、女性 79.1%であった（「性別ダミー変数」は女性を0、男性を1とした）。家族構成は父母のいる核家族は 67.1%と最も多い。父方拡大家族も 18.7%、母子家庭は 2.6%であった（「家族構成」変数は、「核家族ダミー」《父母のいる核家族を1、それ以外の家族を0》、「ひとり親家族」《ひとり親家族を1、それ以外の家族を0》、「拡大家族ダミー」《拡大家族を1、それ以外の家族を0》を作成した）。

成長に関わった人で最も多かったのは母であり、その次に

父、第3位に母方の祖母、次に父方の祖母、さらに母方祖父と母方の親類の関わりが目立つ。家族以外で子育てに関わった人で最も多いのは幼稚園の先生や地域の人々、保育所の先生などを、約半数以上の学生が子育ての担い手として挙げている。成長に関わりのある人の種類は、7種類を上げた人が最も多かった（「成長に関わった人の種類数」については、母、父、保育所や幼稚園の先生、母方祖父母、父方祖父母、地域の人、その他などについてそれぞれの有無を聞き、何種類の人が関わったかを合計した）。

また「自分自身に関してのひとり親の経験」では、母との死別 4.9%、未婚の母によって育てられた学生は 0.4%、母の再婚は 1.6%、父の再婚は 0.2%であった（「自分自身に関してひとり親の経験」は、「高校までに未婚の父母に育てられた経験」、「父母と死別した経験」、「親の離婚を経験」のいずれかを経験したを1とし、「それらの経験なし」を0とした）。

「身の回りにおけるひとり親の存在」に関しては、未婚の母を知っている人 15.9%、未婚の父を知っている人 4.3%、離婚して子育てをしている母を知っている人 57.0%、離婚して子育てをしている父を知っている人 21.5%、死別して子育てをしている母を知っている人 35.9%、死別して子育てをしている父を知っている人 24.8%であった（「身の回りにおけるひとり親の存在」は、「身の回りに未婚の母や父になっ

た人」や、「離婚して子どもを育て人」、「死別して子どもを育てた人」がいる場合を1とし、「それらの経験がない場合」を0とした）。

一方、独立変数のひとつとして、「世間のひとり親の子育てに対する意見」についても、次のように尺度化した。

「未婚で母親だけが子どもを育てることは好ましくない」、「未婚で、父親だけが子どもを育てることは好ましくない」、「離婚して母親だけが子どもを育てることは好ましくない」、「離婚して父親だけが子どもを育てることは好ましくない」、「死別して母親だけが子どもを育てることは好ましくない」、「死別して父親だけが子どもを育てることは好ましくない」

についてこれらの意見をすべて総計して、賛成から反対まで1点から4点を与え、「ひとり親に対する世間の意見」とし、否定的意見から肯定的意見(6点から24点)の一元の尺度を作成した。信頼性分析を行うと、信頼性係数は0.819であったので、「ひとり親の子育てに対する世間の意見」を測定する尺度として採用した。尺度値の平均は13.4で、標準偏差は3.68であった。

さらに「未婚のひとり親に対する世間の意見」を測定するために、「未婚で母親だけが子どもを育てることは好ましくない」と「未婚で、父親だけが子どもを育てることは好ましくない」をたして賛成から反対まで1点から4点までを与え、否定的意見から肯定的意見(2点から8点)の一元の尺度を構成した(信頼性係数0.934)。同様に、「離別のひとり親に対する世間の意見」の尺度を作成し(信頼性係数0.923)、また「死別のひとり親に対する世間の意見」の尺度を作成した(信頼性係数0.941)。

「将来の結婚と子育てに関する意見」については、「結婚し、子どもを持ちたい」と答えた人が83.6%で最も多く、標準的ライフコースを予定している。「子どもがいて再婚することに関する意見」については、どちらかといえば賛成52.5%、賛成15.9%であった。「性別役割分業に関する意見」に関しては、どちらかといえば反対41.9%、反対27.1%と反対が多い。「男女共同参画に関する講義の受講経験」については36.3%が、「家族についての講義の受講経験」については69.4%が「ひとり親家族に関するメディアを見た経験」については29.2%があると答えている。

「大学生の未婚・離別・死別のひとり親の子育てに対する意見」を従属変数とし、①性別、②家族構成、③「成長に関わった人の種類数」、④「自分自身に関してのひとり親の経験」、⑤「身の回りにおけるひとり親の存在」、⑥「ひとり親の子育てに対する世間の意見」、⑦「将来の結婚と子育てに関する意見」、⑧「子どもがいて再婚することに関する意見」、⑨「性別役割分業に関する意見」、⑩「家族に関する講義の受講経験」、⑪「男女共同参画に関する講義の受講経験」、⑫「ひとり親家族に関するメディアを見た経験」を独立変数として設定した。

2) ひとり親の子育てに対する意見の尺度化(従属変数)

従属変数の「ひとり親の子育てに対する大学生の意見」を測定するために、次のような手続きで尺度化し、信頼性分析をした。「未婚で母親だけが子どもを育てることは好ましくない」、「未婚で、父親だけが子どもを育てることは好ましくない」、「離婚して母親だけが子どもを育てることは好ましくない」、「離婚して父親だけが子どもを育てることは好ましくない」、「死別して母親だけが子どもを育てることは好ましくない」、「死別して父親だけが子どもを育てることは好ましくない」をすべて総計して、賛成から反対まで1点から4点

を与え総計した。大学生のひとり親に対して否定的意見から肯定的意見(6点から24点)の一元の尺度を作成した。信頼性分析を行うと、信頼性係数は0.8789であったので、大学生の「ひとり親の子育てに対する意見」を測定する尺度として採用した。この意見の平均は15.5で、標準偏差は4.40であった。

さらに、「未婚のひとり親の子育てに対する大学生の意見」を従属変数として設定し測定するために、一元の尺度を作成した(信頼性係数0.9598)。同様に、「離別のひとり親の子育てに対する大学生の意見」の尺度(信頼性係数は0.9619)、「死別のひとり親に対する大学生の意見」の尺度を作成した(信頼性係数は0.9663)。

3) 重回帰分析結果・パス解析結果

大学生の「ひとり親の子育てに対する意見」を従属変数として、それに与える影響要因を調べるために重回帰分析を行った。性別などの前述した独立変数を投入し、ステップ・ワイズ法で分析した結果、表1のようなモデルを得た。このモデルの R^2 は0.262、調整済み R^2 は0.258であり、求めた重回帰式の当てはまりはよい。また重回帰の分散分析のF値は、75.911で、有意確率は $p < 0.01$ で統計的に有意である。

標準回帰係数は、「ひとり親の子育てに対する世間の意見」($\beta = 0.448$)、「子どもがいても再婚してもよい」($\beta = 0.157$)、「性別役割分業に関する意見」($\beta = 0.084$)、「男女共同参画に関する講義の受講経験」($\beta = 0.075$)、「ひとり親家族に関するメディアを見た経験」($\beta = 0.059$)、将来の結婚と子育てに関する意見($\beta = -0.058$)となり、すべて有意水準5%以下で統計的に有意である。

この結果から、大学生の「ひとり親の子育てに対する意見」は、「ひとり親に対する世間の意見」から $\beta = 0.448$ と、最も大きな影響を受けていたが、今回の重回帰分析の結果から大学生は、世間の意見だけの影響を受けているのではないことが次のように明らかになった。

表1. ひとり親の子育てに対する意見を従属変数にした重回帰分析の結果

独立変数	標準偏回帰係数 β	有意確率	VIF
ひとり親の子育てに対する世間の意見	0.448	$p < 0.01$	1.010
子どもがいて再婚することに関する意見	0.157	$p < 0.01$	1.046
性別役割分業に関する意見	0.084	$p < 0.01$	1.052
男女共同参画に関する講義の受講経験	0.075	$p < 0.01$	1.028
ひとり親家族に関するメディアを見た経験	0.059	$p < 0.05$	1.010
将来の結婚と子育てに関する意見	-0.058	$p < 0.05$	1.025

このモデルのF値=75.911, $p < 0.001$, $R^2=0.262$, 調整済み $R^2=0.258$

共線性の統計量 VIF < 2 個有値の条件指標 < 15

<注>

ステップワイズによって、性別ダミー、核家族ダミー、ひとり親家族ダミー、拡大家族ダミー、自分自身のひとり親体験、身の回りにおけるひとり親体験、成長に関わった人の種類数、家族に関する講義の受講経験が除外された($p > 0.05$)。

①「子どもがいても再婚してもよい」という再婚に対して許容的な意見は、 $\beta = 0.157$ と「大学生のひとり親の子育てに対する肯定的意見」に対しても影響力を持っている。ステップ・ファミリーに対して理解があるほど、ひとり親の子育てに対して肯定的であった。いいかえれば、親の結婚を子どものためにあきらめるといふ子ども中心主義でない人ほど、ひとり親の子育てに対しても肯定的であるともいえる。

②性別分業役割意識を持っていない人ほど、ひとり親の子育てを肯定している。現実としてひとり親になると経済的に外に出て働かざるを得なくなり、「男は家庭外・女は家庭内」という分業はふたり親だからできるのであって、ひとり親は外の役割も内の役割も両方こなさなくてはならない。

③男女共同参画に関する講義の受講経験があるほど、ひとり親の子育てについて肯定的である。大学の講義で、ジェンダーについて学ぶ機会があるほど、ひとり親に対しても肯定的な意見をもつことができるようになる。

④ひとり親家族に関するメディアを見た経験も、大学生のひとり親の子育てに肯定的に影響している。映画やドラマで描かれたひとり親像は、大学生のひとり親に対する理解を促している。

⑤しかし「将来結婚や子育てをしよう」とする標準的ライフコースを描く大学生は、ひとり親の子育てに対して否定的にとらえている。結婚しても子どもを持たないライフコースや結婚しないライフコースを描く大学生ほど、ひとり親の子育てに対して肯定的であった。

ここで得られた5つの独立変数がどのような因果関係の連鎖によって「大学生のひとり親の子育てに対する意見」になるか、Amos16を使ってパス解析を行った。適合度指標を参考にモデルを改良して最適モデルとして得られたのが図7

である。図7のように、これら4つの独立変数で従属変数の説明率が22%であった。このパス解析のモデルでは、「男女共同参画に関する講義の受講経験」の有無は「ひとり親への大学生の意見」への直接効果は0.06と小さいが、「性別役割分業に関する意見」を媒介することによって、「ひとり親への大学生の意見」への影響度が0.15と高まっている。「男女共同参画に関する講義の受講経験」はジェンダーによって固定化した役割観を相対化し、ひとり親の子育てに対して肯定的意見を促す傾向がある。

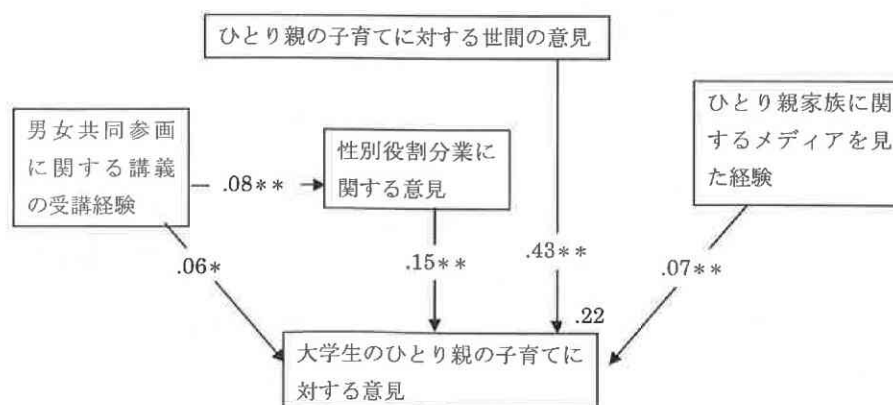
次に表2のように「未婚のひとり親の子育てに対する大学生の意見」を従属変数として重回帰分析を行った。影響を及ぼしている独立変数は先ほどの大学生の「ひとり親の子育てに対する意見」を従属変数とした場合とほぼ同じであるが、男性ほど肯定的な意見を持っていた($\beta = 0.064$)。さらに表3のように、「離別のひとり親の子育てに対する意見」を

表2. 未婚のひとり親の子育てに対する意見を従属変数にした重回帰分析の結果

独立変数	標準偏回帰係数 β	有意確率	VIF
未婚のひとり親の子育てに対する世間の意見	0.358	p<0.01	1.004
子どもがいて再婚することに関する意見	0.154	p<0.01	1.047
性別役割分業に関する意見	0.102	p<0.01	1.056
男女共同参画に関する講義の受講経験	0.066	p<0.05	1.007
性別ダミー	-0.064	p<0.05	1.01

このモデルのF値= 50.314, p<0.001, R²=0.185, 調整済みR²=0.181
共線性の統計量 VIF<2 個有値の条件指標 <15
<注>

ステップワイズによって、核家族ダミー、ひとり親ダミー、拡大家族ダミー、自分自身のひとり親体験、身の回りにおけるひとり親体験、成長に関わった人の種類数、将来の結婚と子育てに関する意見、家族に関する講義の受講経験、ひとり親家族に関するメディアを見た経験が除外された (p>0.05)。



モデルのカイ2乗値 (CMIN) =4.023, 自由度2, 確率 0.134, CFI0.994, RMSEA0.027

* p < 0.05 ** p < 0.01

図7. ひとり親の子育てに対する意見を従属変数としたパス解析結果

表 3. 離別のひとり親の子育てに対する意見を従属変数にした重回帰分析の結果

独立変数	標準偏回帰係数 β	有意確率	VIF
離婚のひとり親の子育てに対する世間の意見	0.195	p<0.01	1.048
子どもがいて再婚することに関する意見	0.183	p<0.01	1.004
性別役割分業に関する意見	0.071	p<0.05	1.044
ひとり親家族に関するメディアを見た経験	0.067	p<0.05	1.004

このモデルの F 値 = 28.644, p<0.001, R²=0.093, 調整済み R²=0.090
共線性の統計量 VIF<2 個有値の条件指標 <15
<注>

ステップワイズによって、性別ダミー、核家族ダミー、ひとり親ダミー、拡大家族ダミー、自分自身のひとり親体験、身の回りにおけるひとり親体験、成長に関わった人の種類数、将来の結婚と子育てに関する意見、家族に関する講義の受講経験、男女共同参画に関する講義の受講経験が除外された (p>0.05)。

表 4. 死別のひとり親の子育てに対する意見を従属変数にした重回帰分析の結果

独立変数	標準偏回帰係数 β	有意確率	VIF
死別のひとり親の子育てに対する世間の意見	0.534	p<0.01	1.004
子どもがいて再婚することに関する意見	0.074	p<0.01	1.042
性別役割分業に関する意見	0.053	p<0.05	1.044

このモデルの F 値 = 158.446, p<0.001, R²=0.302, 調整済み R²=0.300
共線性の統計量 VIF<2 個有値の条件指標 <15
<注>

ステップワイズによって、性別ダミー、核家族ダミー、ひとり親ダミー、拡大家族ダミー、自分自身のひとり親体験、身の回りにおけるひとり親体験、成長に関わった人の種類数、将来の結婚と子育てに関する意見、家族に関する講義の受講経験、男女共同参画に関する講義の受講経験、ひとり親家族に関するメディアを見た経験が除外された (p>0.05)。

表 5. 等質性分析 ひとり親の子育てに対するイメージ・カテゴリウエイト表

カテゴリ	I 軸	II 軸
子どもが寂しい	0.179	-0.243
子どもが寂しくない	-0.782	1.063
しつげがゆきとどかない	0.3	-0.887
しつげがゆきとどく	-0.173	0.512
親子の助け合い	0.202	0.109
親子の助け合いなし	-1.539	-0.841
子どもの早期精神的自立	0.413	0.183
子どもの早期精神的自立なし	-1.012	-0.451
親子密着	0.542	-0.526
親子密着しない	-0.141	0.138
親が負い目	0.383	-0.367
親の負い目なし	-0.487	0.465
子どもの早期経済的自立	0.466	0.141
子どもの早期経済的自立なし	-0.961	-0.292
子どもの家事手伝い	0.275	0.132
子どもの家事手伝いなし	-1.401	-0.653
子育てと仕事の両立困難	0.164	-0.287
子育てと仕事の両立	-0.585	1.021
子どもが相談相手	0.457	0.202
子どもが相談相手にならない	-0.465	-0.207

従属変数として重回帰分析も行ったが、「大学生のひとり親の子育てに対する意見」を従属変数とした場合と同じような影響がみられた。最後に「死別のひとり親の子育てに対する意見」を従属変数として重回帰分析を行ったが、表 4 のように同様な影響要因が見られた。

以上の未婚・離別・死別ごとの重回帰分析の結果にみられる特徴は、未婚の場合のみ、ひとり親の子育てに対して、男性に肯定意見が多かったことである。この結果は、先に述べたように将来「未婚で子どもをもうける」ことに対して男性のほうが許容的であったことと符合している。

(4) ひとり親の子育てに対するイメージ

大学生がひとり親に対して持つイメージはどのようなものだろうか。東京都女性問題調査研究報告「ひとり親家族に関する研究」の設問を参考として 10 項目の「大学生のひとり親の子育てに対するイメージ」を測定する質問を設定した。設問の回答パターンからどのような特徴が見出されるかについて、親子関係を類型化し、「ひとり親の子育てに対するイメージ」を探った。

ひとり親の子育てに対するイメージとして、「子どもに寂しい思いをさせる」、「子どものしつげがゆきとどかない」、「親子で助け合っている」、「子どもが早くから精神的に自立する」、「親子関係が密着しすぎる」、「親が子どもに負い目を感じる」、「子どもが早くから経済的に自立する」、「子どもが家事を手伝ってくれる」、「子育てと仕事の両立が難しい」、「子どもが親の相談相手になってくれる」の 10 項目を「肯定」、「否定」イメージの 2 カテゴリとした。いずれの回答も「無回答」を除外した。これらのカテゴリは、カテゴリ間に順序関係のない名義データであるので、数量化によって、似ているカテゴリを探す最適尺度法による等質性分析 (HOMALS) を使って、大学生のひとり親の子育てに対する親子関係類型を構成する軸を求めた。

1) カテゴリ間の関係

表 5 の等質性分析・ひとり親の子育てに対するイメージのカテゴリウエイト表をみていくと、第 1 軸 (X) のプラス側のカテゴリとして、「子どもの早くからの経済的自立」0.466、「子どもの精神的自立」0.413、「親子が密着」0.542 といった子どもの経済的・精神的・生活の自立に関する項目がある。第 1 軸を概観すると、プラスの側には、子どもと親が密着しているが、早くから経済的自立や精神的自立をするというカテゴリがあるのに対して、マイナスの側には親子が相談相手とならず、早期から経済的自立や精神的自立をしていないカテゴリがある。

第二軸は、プラスの側に「子どもが寂しくない」1.063、「子育てと仕事の両立」1.021 のような高い絶対値をとるカテゴリからマイナスの側には「しつげがゆきとどかない」-0.887、「親子の助け合いなし」-0.841 といったカテゴリ

が布置され、ひとり親の子育ての難しさを気にしていることがみえる。

そこで、表6の判別判定をもとにし、第Ⅰ次元（X軸）を子の自立軸（自立早くから有り－自立無し）とし、第Ⅱ次元（Y軸）を、親離れ軸（親離れ－親離れなし）とした。この第Ⅰ軸と第Ⅱ軸を組み合わせてプロットした図が、図8の等質性分析・カテゴリーウェイト・プロット図である。

2) イメージの析出

第1象限の親子関係類型は、「子どもが経済的、精神的に早く自立」し、「親の相談相手」をして子どもが支えとなっ

ているとなり、「親と子が助け合い」をして、自立をしながらも、助け合って暮らしている「親子早期自立イメージ」群といえよう。第2象限の親子関係類型は、「密着しない親子関係」、「子育てと仕事の両立」、「親の負い目は感じない」、「子どもは寂しくない」「しつけはゆきとどいている」に特徴づけられるように、早くから親離れ子離れがすすみ、親と子の世界を住み分けた「親離れ子離れイメージ」群といえよう。第3象限の親子関係類型は、子の経済的自立、精神的自立は特に早くから進むとは思わないが、親子の助け合いはなく子どもも相談相手にならないと感じる「親子孤立イメージ」群といえよう。第4象限の親子関係類型は、「親子は密着」しているが、親は「子育てと仕事の両立困難」で、そのため「しつけもいきとどかなく」、「親は子どもに負い目」を感じ、「子どもも常に寂しい」思いをしている「親子共依存イメージ」群といえる。

(5) 「未婚・離婚・死別のひとり親に対する大学生の意見」とイメージの関係

次に、第1次元、第2次元のホルムスのオブジェクト・スコアをもとにして、大学生のひとり親に対する意見尺度との関連を見た。

分析の手続きとして、「子の自立が早い」のオブジェクトスコアに対して2点を、「子の自立が早いとはいえない」のオ

表6. 判別判定

	次元	
	次元1	次元2
* 子どもが寂しい	0.138	0.256
* 子どものしつけがゆきとどかない	0.051	0.449
親子で助けあっている	0.357	0.091
子どもの早くからの精神的自立	0.413	0.082
親子関係の密着	0.076	0.072
親が子どもに負い目	0.185	0.169
子どもの早くからの経済的自立	0.442	0.041
子どもが家事を手伝う	0.380	0.084
* 子育てと仕事の両立困難	0.095	0.290
子どもが親の相談相手	0.210	0.041

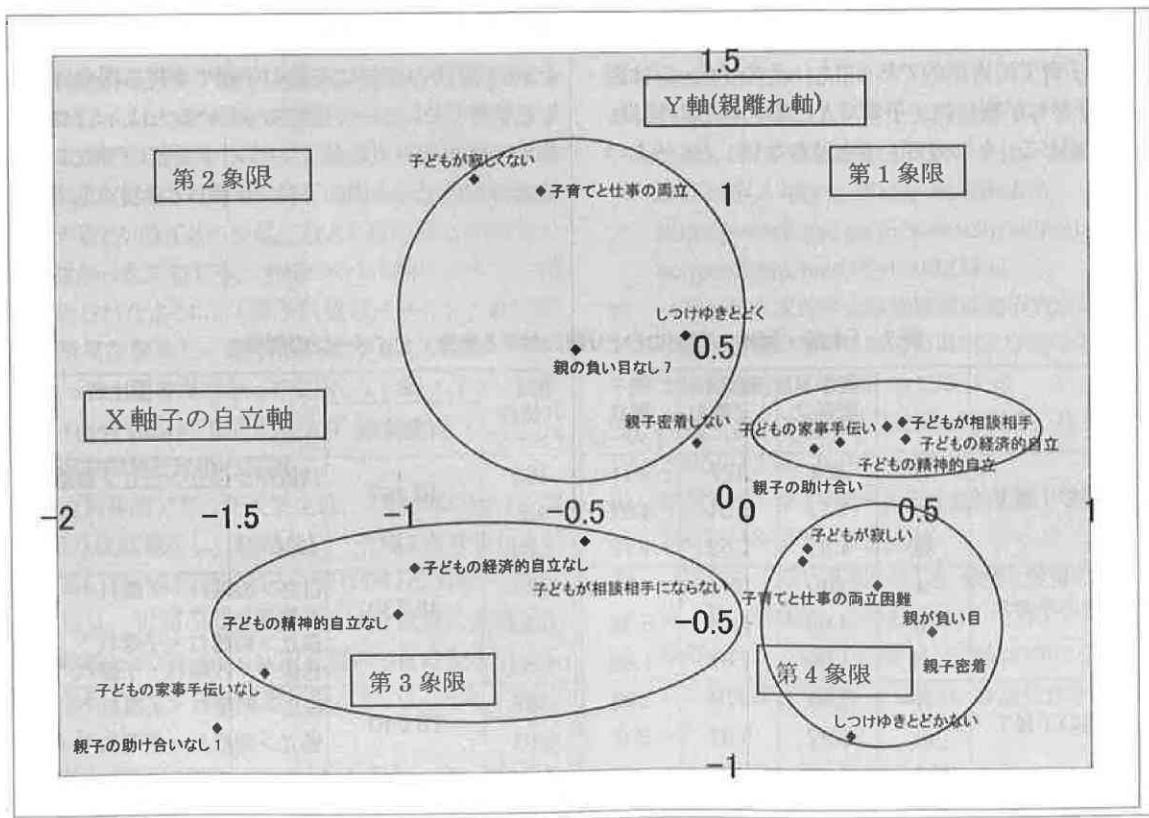


図8. 等質性分析・カテゴリーウェイト・プロット図

プロジェクトスコアに対して0点を与え、次に「親離れしている」に2点、「親離れしていない」に1点を与えた。回答者ごとにオブジェクトスコアを足し合わせた。このように2次元を組み合わせたタイプである「親子早期自立イメージ」群、「親離れ・子離れイメージ」群「親子孤立イメージ」群、「親子共依存イメージ」群に点数を与えた。

これらのイメージ群と未婚・離婚・死別のひとり親の子育てに対する大学生の意見尺度との関連について、一元配置分散分析を用いた結果が表7である。

未婚のひとり親の子育てに対する大学生の意見に関して、多重比較の結果「親子共依存イメージ」群の平均値の得点4.90が最も高いという結果となり、次に「親子孤立イメージ」群4.51、「親子早期自立イメージ」群4.12、最下位となったのは「親離れ子離れイメージ」群3.51であった。

親子が密着した子育てをしながら、仕事の両立に悩んでいる、そして親は子どもに負い目をいつも感じているというイメージ群（「親子共依存イメージ」群）が最も未婚のひとり親に対する肯定意見の平均値が高いという結果を得た。

その一方で早くから親離れ子離れがすすみ、親と子の世界を住み分けた、割り切ったイメージ群（「親離れ・子離れイメージ」群）が最も未婚のひとり親に対する肯定意見の平均値が低かった。

未婚という社会的制度から守られない状態で子育てをすることに、親子が肩を寄せ合って世間の風に向かっているイメージが未婚の親の子育ての姿としてとらえられている。未婚の子育てに肯定的であっても、そのイメージは図8のように「子どもが寂しい、子育てと仕事の両立が困難、親が負い目を感じる、しつけがいきとどかない」というものであった。

表7のように、離婚のひとり親の子育てに関する肯定意見においても、また死別のひとり親の子育てに関しても、「親離れ・子離れイメージ」群はもっとも平均点が低く、離婚や死別のひとり親が早く子離れをすることや自分の世界を持つことは、あまり子育てのイメージとして肯定的にとらえられていない。また離婚のひとり親の子育てについては、「親子早期自立イメージ」群4.99より「親子共依存イメージ」群5.53のほうが、肯定意見の平均点が高い。離婚の親の子育てを肯定した人の中で多かったイメージは、親の離婚により子の自立が促進されるというイメージよりも、むしろ離婚によって親が負い目を背負い、子と親が密着して暮らしているというイメージであった。

5. 結論と今後の課題

以上の結果から、下記のような結果が得られた。

(1) 先行研究との比較

ひとり親が子育てをすることについては、未婚、離別、死別の順で反対意見が多く、育てる親が母親であっても父親であっても同じ様な傾向を示した。東京都女性問題調査研究報告においても9割の大学生が最も抵抗感を感じる生き方として「未婚の母や父となること」が挙げられていた結果と比較しても、未婚の子育てに対する意見は依然として否定的である。自分自身がひとり親で育ったケースは、母子家庭2.6%であったが、「身の回りにおけるひとり親の存在」に関しては、未婚の母を知っている人15.9%、未婚の父を知っている人4.3%と周囲の家族に未婚の子育てを見る機会はある。離婚して子育てをしている母を知っている人は、57%もいた。家族の多様化を身近に感じながら、死別の子育てに関しては比較的許容的で、未婚の子育てに関しては否定的であった。

表7. 「未婚・離婚・死別のひとり親に対する意見」とイメージの関係

従属変数		親子早期自立イメージ	親離れ・子離れイメージ	親子孤立イメージ	親子共依存イメージ	F	多重比較 Tukey HSD
						有意確率	
未婚のひとり親の子育てに対する意見	n	291	377	401	289	40.297	共依存>孤立>自立>親離れ子離れ*
	m	4.12	3.51	4.51	4.9		
	sd	1.87	1.52	1.72	1.84		
離婚のひとり親の子育てに対する意見	n	290	383	401	289	38.530	自立>親離れ・子離れ* 共依存>自立* 孤立>親離れ・子離れ* 共依存>親離れ・子離れ*
	m	4.99	4.18	5.32	5.53		
	sd	1.89	1.67	1.84	1.89		
死別のひとり親の子育てに対する意見	n	290	379	398	287	28.540	自立>親離れ・子離れ* 孤立>親離れ・子離れ* 共依存>親離れ・子離れ*
	m	6.27	5.57	6.6	6.61		
	sd	1.73	1.97	1.61	1.64		

**p<0.01 *p<0.05
n= タイプの総数, m= 平均値, sd= 標準偏差

(2) ひとり親の子育てに対する大学生の意見に影響を与える要因

「ひとり親の子育てに対する意見」に与える影響要因を重回帰分析によって調べると、「ひとり親の子育てに対する世間の意見」すなわちひとり親をめぐる社会的風潮が、大学生の「ひとり親の子育てに対する意見」に大きな影響を及ぼしていることがわかった。しかし、このような社会的風潮に左右されているばかりでなく、「子どもがいて再婚することに関する意見」、「性別役割分業に対する意見」、「男女共同参画に関する受講経験」、「ひとり親家族に関するメディアを見た経験」、「将来の結婚と子育てに関する意見」も影響力を持っていた。子連れ再婚に対して許容的であるほど、ひとり親の子育てに対して肯定的であった。男女共同参画についての講義を受けた経験があるほど、ひとり親の子育てに対して肯定的であった。また「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業に対して否定的な意見を持つほど、ひとり親の子育てに対して肯定的であった。ひとり親を扱ったマスメディアもまた大学生の意見に肯定的に影響を及ぼしていた。しかし、将来のライフコースが結婚もし子育てもするという標準的ライフコースを望む者ほど、ひとり親の子育てについて否定的な意見を持っていた。パス解析によって、得られた結果からは「男女共同参画に関する受講経験」があり、しかも性別分業に関する意見に否定的であることが、大学生の「ひとり親の子育てに対する意見」に肯定的に影響を与えていた。

(3) ひとり親の子育てに対するイメージ

「親子早期自立イメージ」群、「親離れ子離れイメージ」群、「親子孤立イメージ」群、「親子共依存イメージ」群の4つが析出された。イメージと死別・離婚・未婚のひとり親の子育てに対する意見の関係をみると、「親離れ・子離れイメージ」群がもっとも支持されなかった。ひとり親と子が距離を持って生活するというイメージは、ひとり親の肯定的意見にはつながらなかった。むしろ、未婚のひとり親の子育てに関する意見でみられたように、「親子共依存イメージ」群が最も肯定的な意見を集めた。親子の距離が短く、双方で助け合うことによって、肩を寄せあつて生活しているイメージが未婚の親子のイメージとして肯定的に大学生はとらえている。

(4) この調査の限界と今後の課題

今回の調査対象者であった大学生は、これからのライフコースでどのような就職をし、結婚をし、子育てをするかまだ白紙に夢を描いている段階である。彼らのひとり親の子育てに関する意見は、世間のひとり親に対する意見に影響されやすいと同時に、現在の経済状況を鑑みると安全な道すなわち標準的なライフコースを無事に進んでいくことを「よし」とする傾向もみられた。

多様な家族は周囲に存在しているけれども、「自分自身のこと」ではなく「よそ事」として多様な家族に対して意見を述べたのではないかという懸念もある。またひとり親の子育

てといっても、子どもの年齢によって子育てに対する意見もイメージも異なることにも留意すべきであった。今後は調査対象者を子育て中の夫婦として、実際に子育てをしている養育期の同年齢のひとり親の子育てに対してどのような意見を持つかを調べてみたい。

今回の調査からひとり親に対する大学生の意見にジェンダーに関する教育の意義が確認された。「男女共同参画に関する教育」の機会を持つことが、性別役割分業に関する意見に影響を与え、「ひとり親」に対して肯定的になることに貢献していた。

この研究は、平成18年度から平成21年度科学研究費補助金(基盤研究C, 課題番号19510284 研究代表者: 竹田美知)の研究成果であり、国際家政学会(IFHE THE 21TH WORLD CONGRESS)第21回スイス・ルツェルンで、口頭発表をした。また調査に関して、(社)日本家政学会家族関係部会平成18年度～平成20年度研究活動部会のメンバーの協力を得て行った。ここに付記して謝意を表します。

引用文献

- 1) 総務庁統計局, 平成17年国勢調査, 2006, 日本統計協会 <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/kihon1/00/04.htm#a01>
- 2) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局, 平成18年度全国母子世帯等調査結果報告書, 2007, <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/boshisetai06/02-b01.html>
- 3) 内閣府: 平成17年国民生活白書「子育て世代の意識と生活」, 第1章結婚出生行動の変化, 補論1結婚行動における新しい流れ, 2005, 時事画法社 http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h17/01_honpen/html/hm01ho10002.html
- 4) (社)日本家政学会家族関係部会研究活動委員会, ひとり親家庭等に関する都道府県および政令指定都市調査・支援策資料集, 2008, p.133-139
- 5) 藤原千沙, ひとり親の就業と階層性, 社会政策学会誌, 2005, 13号, p.161-173
- 6) 神原文子, ひとり親家族と社会的排除, 家族社会学研究, 2007, 18-2号, p.11-24
- 7) 山田昌弘, "近代家族のゆくえ: 家族と愛情のパラドックス", 第1版, 新曜社, 1994, p.214-237
- 8) 牧野カヅコ, 子育ての場という家族幻想 - 近代家族における子育て機能の衰退 -, 2009, 家族社会学研究 21-1号, p.7-16
- 9) Allport G.W, *The Nature of Prejudice*, Doubleday Anchor book Garden City, NJ, 1954, (=1968, 原谷達士訳, 『偏見の心理』培風館, p.248-250)

- 10) 財団法人東京女性財団, 東京都女性問題調査研究報告・ひとり親に関する研究, 1993, p.18-23
- 11) 渡辺秀樹, ひとり親家族と現代家族問題, 子どもと家庭, 1993, 267号, p.35-45
- 12) 財団法人北海道民生委員児童委員連盟, ひとり親家庭(父と子・母と子の家庭)の生活と意識に関する調査報告書[民生委員モニター調査], 2009, p.43, p.88-98
- 13) 竹田美知, 国際結婚から生まれた子どもの国籍選択とその影響要因-国際結婚を考える会の場合-, 日本家政学会誌, 2005, 56(1), p.3-13